

日本性科学学会 ニュース

第30巻 第3号

平成23年（2011年）9月

発行人：大川 玲子 印刷所：(株) 絢文社

第31回日本性科学学会／第13回性科学セミナーのご案内

日時：2011年10月2日（日）第31回日本性科学学会／2011年10月1日（土）第13回性科学セミナー
場所：東京慈恵会医科大学西新橋校1号館3階・5階講堂
〒105-8461 東京都港区西新橋3-25-8 TEL：03-3433-1111(代)
JR 新橋駅 烏森口より徒歩約15分、タクシー約5分、都営地下鉄三田線 御成門駅より徒歩約5分
参加費：日本性科学学会 5,000円（学生 1,000円）、性科学セミナー 3,000円（学生 1,000円）、
日本性科学学会＋性科学セミナー（2日間）7,000円（学生 2,000円）
合同懇親会：2011年10月1日（土）性科学セミナー終了後
〒105-0002 東京都港区愛宕1-6-6 TEL：03-3431-0109 新橋愛宕山東急イン 会費：4,000円

2011年10月1日（土）13:00～17:30 第13回性科学セミナー

テーマ：災害とジェンダー、セクシュアリティ

特別講演：「震災復興にジェンダー・多様性の視点を」

東日本大震災女性支援ネットワーク女性の安全と健康のための支援教育センター 丹羽 雅代
講演1：「震災における生と性を守る意味とは」 東京医療保健大学医療保健学部看護学科 渡會 睦子
講演2：「『大震災』地震・津波・原発事故とセクシュアルヘルス」 村口きよ女性クリニック 村口 喜代
講演3：「災害とジェンダー」 東京歯科大学市川総合病院産婦人科 小川真里子
講演4：「災害とリプロダクティブヘルスへの国際支援」 (社)日本家族計画協会理事 小長井春雄
講演5：「平時からできるワクチンによる性感染症予防」 順天堂大学医学部総合診療科 内藤 俊夫

2011年10月2日（日）9:00～16:30 第31回日本性科学学会

会長：茅島江子 東京慈恵会医科大学医学部看護学科教授

メインテーマ：性の健康を未来につなぐ

特別講演Ⅰ「環境因子と子どもの健康」

千葉大学大学院教授 森 千里

特別講演Ⅱ「人権とセクシュアリティー日本とラテン社会のピアカウンセリング活動を通して」

自治医科大学名誉教授 高村 寿子

会長講演「性の健康と看護」

シンポジウムⅠ「看護における性の健康支援」

慢性疾患患者のセクシュアリティと看護

千葉県立保健医療大学准教授 大谷真千子

女性脊髄障害者のセクシュアリティと看護

国立身体障害者リハビリテーションセンター看護師

道木 恭子

不妊症患者のセクシュアリティと看護

聖路加看護大学教授 森 明子

がん患者のセクシュアリティと看護

昭和大学医学部乳腺外科講座特別研究生

渡邊 知映

シンポジウムⅡ「性暴力・性犯罪とその対応」

性暴力被害を受けた女性の支援

すぺーすアライズ室長

麻島 澄江

医療現場における性暴力被害者への支援

まつしま病院院長

佐々木静子

性犯罪加害者への治療

はりまメンタルクリニック院長

針間 克己

性犯罪加害者へのカウンセリングの実践

東京大学大学院教育学研究科専任講師

石丸徑一郎

一般演題

第31回日本性科学学会事務局 〒182-8570

東京都調布市国領町8-3-1

東京慈恵会医科大学医学部看護学科母性看護学領域

担当：細坂泰子、抜田博子

TEL：03-3480-1151 FAX：03-3480-4739

e-mail：jsss2011@email.plala.or.jp

ホームページ：http://jsss2011.plala.jp

Vol. 30

№.
3

日本性科学学会

〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館3F

長谷クリニック内

TEL 03(3475)1780 FAX 03(3475)1789

性交痛と漢方

私のクリニック目白婦人科 藤井 祐美

私は都内のクリニックで一般婦人科外来を担当しているが、看板やホームページで性についての案内を一切していないにも拘わらず、性の悩みの相談は比較的多く、これ程多くの女性が性の悩みを抱えているのかと驚いている。今回その中で性交痛の症例について症例研究会で報告する機会を与えて頂き、大変貴重な御意見をお聞きできた。

テイラー症候群が疑われる一例

(1) 症 例

36歳 女性 未婚 妊娠出産歴なし。

左腎結石の既往歴がある。また8年前より不眠症のため、近医内科よりマイスリーが処方されている。

(2) 経 過

数ヶ月前から突然出現した性交痛のため受診。膣粘膜ではなく、膣奥が痛い。数年来同じパートナーと性交渉を持っているが、以前には全く性交痛はなかった。彼との関係は良好で特に影響はないと思う。その他大きなストレス等思い当たらない。月経痛は10代にはあったが、現在はあまりない。

(3) 検 査

内診では、子宮頸部の移動痛を認めた以外には異常を認めず、子宮内膜症を積極的に疑う所見は見られなかった。子宮頸部細胞診、経膣超音波検査は異常なく、膣分泌物培養、クラミジア抗原PCR法、淋菌抗原PCR法は全て陰性であった。

後日行った血液検査においても、炎症反応は見られずクラミジア抗体も陰性であった。

(4) 方 針

問診や診察から、子宮内膜症や骨盤腹膜炎による性交痛の可能性は低いと考え骨盤鬱血によるテイラー症候群の可能性を検討した。性交時の緊張やストレスにより痛みが起きることもあるので、リラックスすること（性交前に少しお酒を飲んだり、ゆっくり入浴したりする）や、膣の弛緩の練習として、骨盤底筋体操を指導した。

また、テイラー症候群（骨盤鬱血）ならば、漢方の駆瘀血剤が有効ではないかと考え当帰芍薬散（ツムラ23番 7.5g分3）を処方した。心理カウンセリングも同時に勧めたが、希望されなかった。

(5) 再 診

性交痛は著明に改善し、月経痛が消失（もともとあまりなかったが、完全になくなった）した。体が温まり、冷えが改善した。当帰芍薬散が体に合うので続けたい、とのことであった。現在当帰芍薬散内服にて経過観察中である。

(6) 考 察

① 性交疼痛症の分類

性交時に疼痛を訴える性交痛は、女性の性機能障害の中では挿入障害の次に頻度の高い訴えであるが、原因は多岐に渡り治療に難渋することも多い。原因は痛みの部位により異なるが、骨盤内の疼痛を認めるものと、膣粘膜や外陰に痛みを認めるものがあり、後者の代表的な原因として、閉経後の委縮性膣炎によるものや、前々回の症例研究会でも取り上げられた外陰痛症 vulvodynia（または外陰前庭症候群 VVS）などがある。

委縮性膣炎による性交痛がホルモン補充療法で比較的改善しやすいのに比べ、その他の性交痛のほうがより治療が困難で、本人の悩みも深刻な印象を受けている。

② Taylor症候群は過去の病態か

Taylor症候群とは1940年代にテイラー博士の提唱した概念だが、教科書的には「情緒的ストレスによる骨盤内鬱血の結果生じるものも含まれるが、子宮内膜症によると思われる場合もあり、以前はこのような状態をTaylor症候群と記載したが、種々の病態を含むため、最近ではあまり用いられなくなっている。」（プリンシプル産婦人科より）との記述もある。

因みに、複数の産婦人科医に聞いてみたが、誰一人としてテイラー症候群のことを知らなかった。しかし症例研究会では、臨床心理士の先生に心身医学の学会ではしばしば取り上げられる疾患であると教えて頂いた。また、個人的にも経験上、器質的な異常のない慢性骨盤痛や性交痛の原因としてあり得るのではないかと考えている。

③ 治 療

純粋なテイラー症候群（精神的なストレスによる骨盤鬱血）と考えたと、精神安定剤の処方ぐらいしか方法がないようにも思えるが、骨盤鬱血＝瘀血と考えたと治療法の幅が広がる。

本邦での文献は少ないが、テイラー症候群は骨盤鬱血症候群とも呼ばれ、駆瘀血剤を使用して有効だった報告が複数見られた。（2002年佐野ら、2003年清水ら）それらの報告によると、疼痛の強さや患者の証により桂枝茯苓丸や桃核承気湯、温経湯、当帰芍薬散などを使い分けるようである。

東洋医学における瘀血とは幅の広い考え方で、全身または局所の血液の滞りと解釈でき、月経不順、月経痛、更年期障害、骨盤痛などの他、子宮筋腫や子宮内膜症そのものも瘀血に因ると考える。

西洋医学的には、やや曖昧すぎるとも感じられる概念だが、西洋医学で有効な手立てのない慢性疼痛の患者には救いの手になることが少なくない。器質的な異常の見られない場合、産婦人科医はとすると、‘gyne frei（婦人科異常なし）’と結びがちだが、異常がなくとも疼痛の存在を認めて粘り強く加療することも大切だと実感した。

第20回 WAS グラスゴー 2011に参加して

神奈川県立汐見台病院産婦人科 早乙女 智 子

Forging the future- sexual health in the 21st century 「作り出される未来—21世紀の性の健康」と題した、スコットランドはグラスゴーの町で6月11日から17日に開催された世界性の健康学会に出席した。寒いだろうとは思っていたが、6月のスコットランドは涼しいという感覚を超えて肌寒かった。 持って行った服を重ね着してしのいだ。

これまで私はWASへの参加は横浜でポスター賞を頂いたのと、神戸での参加と、国内での参加しかしていなかった。英語能力や休暇の問題などなかなか余裕がなかったが、前回のオスロでのWAS参加から調子づいて、2009年のEFS (ポルトガル)、2010年のインドネシア・バリでのAOCS、そして今回のグラスゴーでのWASと、このところ続けて海外の学会に参加することができた。

今回日本からの参加者は18名。ポスター会場には各国の参加者一覧が張り出されており、それで見ると日本人が張り出されている面積は意外に多くない印象を受けた。

特筆すべきはやはり我が池上千寿子先生のゴールドメダル受賞だろう。ハワイ大学のミルトン・ダイヤモンドの元で学んだ1期生で、様々な活動を経て2005年にはエイボン女性賞と、ULTIMARC賞をエイズ教育に貢献した旨で受賞されており、今回はWASのゴールドメダリストとなった。残念なことに、ご家族のご都合で出席を断念され、直接賞を授与されることはなかったが、大川玲子先生、東優子先生が、池上先生のプロフィールなどのまとめを紹介され、「HIVと性の健康—日本からのメッセージ」と題したビデオが流れ、改めて池上先生の足跡を学ぶことができた。心からお祝い申し上げたい(写真1)。

また、番外編としては、会期中の6月12日オープニングセレモニー直前に、2001～2005年の会長だったマーク・ガネム先生の訃報が届き、会場に衝撃が走ったことだろう。セクソロジストであり、産婦人科医のガネム先生はまだ60歳くらいで、心臓発作とのことだった。急遽、プログラムの中に、追悼式が加えられ冥福を祈った。あまりに急であったので、関係者にとっては耐えがたいこととは承知で不謹慎かもしれないが、会長をした学会の会期中に、皆に惜しまれて亡くなるのは、幸せなご人徳だなあとも思う。ご冥福をお祈りしたい。

会場は、川沿いのSECCというカンファレンスセンターであった(写真2)。シンポジウム発表は高橋都先生の乳癌とセクシュアリティ、東優子先生のトランスジェンダーに関するもので、東先生は2つのシンポジウムの座長もされていた。プレゼンテーション付のポスター発表に選ばれたのは、若手の正岡美緒さんの発表で、ポスター発表は日本から10演題で、私も産後のセックスレスをテーマに末席を汚させて頂いた。個人的には最も印象に残ったのは、早朝に行われたミート・ザ・エキスパートでのオランダのE.T. ラーン先生の骨盤底の過活動に関することだった。もっと学びたい、と今更ながら思った次第である。

夜のグラスゴーは、やはりPUBごはん!である。みんなで夜な夜な(?)飲みに行った。イギリスにいいものはない、などという話を聞くが、スコッチウイスキーに、郷土料理の「ハギス」があれば何もいらない、と思うほど、おいしかった。やはりその土地に合う食べ物があるのだろう。日本で食べられないものはないと思っていたが、ハギスは日本では手に入らない。スコッチショップでもベジタリアンハギスは取り寄せられたが、肉の輸入ができないらしい。ハギスは、マトンを内臓までミンチにして、オートミールと煮込んだもので、色は真っ黒でイカ墨チャーハンのような不思議な食べ物だった。スコッチ片手に、世の中にテレビなどいないと思うほど、現地の人たちはそこにいて人とすぐに打ち解けて、いつまでもおしゃべりしている。飲み物だけは1杯頼むごとに支払うのが少々面倒に感じたが、酔った後でまとめて請求されるより、気持ちよく飲めると思った。デザートにもスコッチ、と頼んだら、少し甘めのスコッチのお湯割が出てきてまた乙な味だった。

会場で知り合ったインドからの参加者に、湖水地方への格安日帰りバスツアーに行かないかと誘われたが、残念ながら私のポスター発表の日でいけなかったが、ネス湖など素晴らしい風景を堪能してきたい。私は空いた時間で町のはずれの大聖堂に、イタリア・フランス・ブラジル・チリからの参加者とミニツアーに行ったり、ちょっと足を伸ばしてペーズリーの町を散策したり、オーストラリアからの参加者の飲み会に合流させてもらったりと、片言の英語で国際交流を図って大いに楽しんできた。オーストラリアは日本の次に2014年にAOCSを開催することが決まっている。

さて、目下の課題は2012年、松江で開催されるAOCSである。私は学術委員の一人を仰せつかっている。日本ならではの、日本だからできることを、などと夢はつきない。せっかくのアジア大会なので、日本を紹介しつつ、さらに海外の友達を増やせたら、と考えている。せっかくの機会なので、多くの皆様と一緒に盛り上げていきたいものである。

ちなみに、昨年からWASでは9月4日を「世界性の健康デー」とし、各国で性の健康を推進することを提唱している。昨年は大阪・東京、今年は大阪と横浜でそれぞれイベントを開催したが、この動きが次年度はさらに広がることを願っている。



写真1



写真2

書籍紹介

川崎医科大学産婦人科の宋美玄です。この場をお借りして、私の著書と活動について紹介させていただきます。

「女医が教える本当に気持ちのいいセックス」(平成22年5月ブックマン社刊): 一般産婦人科医として臨床に当たってきましたが、患者さんから性交痛やオルガズム障害など性に関する相談を受けることが度々ありました。性機能については産婦人科学ではほとんど扱われず、知識が不十分であった為、責任を持って診療するために日本性科学会に入会しました。性機能について学ぼう、専門家だけでなく一般の人たちも知識を身につけるべきではないかと思うようになりました。所謂「疾患」をもつ人より、性について悩みを抱える人のほうが潜在的に多いのではないかと感じてきたからです。そこで、性科学の基礎知識を一般向けに分かりやすい言葉で解説し、よくある世間の性の誤解を解く内容の本書を執筆するに至りました。

「女医が教える本当に気持ちのいいセックス 上級編」(平成23年6月ブックマン社刊): 「女医が教える本当に気持ちのいいセックス」に予想しなかったほど大きな反響があり、多くの新聞や雑誌からの取材が多くありました。最近では、対象の年代や性別を問わず数多くのメディアで性についての特集が組まれ、視聴者や読者にも大きなニーズがあるようです。中でも性ホルモンに関することと中高年の性については、多大な関心が寄せられていると感じました。多くの反響の中で啓蒙の必要性を感じたものの中から、根強く信じられている性についての誤解、性ホルモンと男女の更年期、勃起・射精障害、Gスポットについての最近の知見などについてまとめ、出版しました。

これらの著書を執筆するにあたり、泌尿器科分野で川崎医科大学の永井敦教授にご指導をいただきました。

私だけでなく、一般産婦人科医は一般診療の中で患者たちから性とセックスに関する相談を受けることが時々ありますが、親身かつ適切に対応している医師は少数派だと想像されます。毎日女性生殖器を診察していますが、自分たちが診察している器官が性機能に関わるものだという認識が薄い医師が多いからです。一産婦人科医である私が、これらの著書を出版して一般の人たちに読まれるようになることで、他の産婦人科医の方々が自分たちの臨床は女性の性に直結することなのだと理解し、重要性について再認識するきっかけとなれば幸いです。

性に関するものの他に、妊娠出産に関して「安全は当たり前ではない」と必須知識を啓蒙する「産科女医からの大切なお願い〜妊娠・出産の心得11ヶ条」(平成21年12月無双舎刊)や、コミックエッセイ「踊る産科女医」(原案・監修、平成23年1月小学館刊)があり、メディアを利用した性教育や啓蒙活動に乗り出しています。

現在は川崎医科大学で、出産と女性の性機能、セックスと早産の関係などについて研究に携わりながら、横浜・元町の女性医療グループLUNAクリニックと東京・中目黒の育良クリニックにて一般産婦人科診療と性についての相談外来をしています。若輩のため未知のことが多くありますが、臨床から学ぶ事は非常に多く、日々研鑽を積んで参りたいと思います。



12AOCS便り: 松江開催の第12回アジア・オセアニア性科学学会 (2012.08.2-5) まで、10ヶ月あまりです (<http://www.12aocs.jp/>) 第32回日本性科学学会も共催となります。登録・一般演題募集は来年から。Webをご注目ください。

(大会会長 大川玲子)